福岡・今山（いまやま）遺跡

1　所在地　福岡市西区横浜二丁目

2　調査期間　第八次調査　一九九九年（平11）九月～二〇〇〇年三月

3　発掘機関　福岡市教育委員会

4　調査担当者　米倉秀紀

5　遺跡の種類　港湾施設跡ヵ

6　遺跡の年代　縄文時代、弥生時代、古墳時代、平安時代

7　遺跡及び木簡出土遺構の概要

今山遺跡は弥生時代の石斧製作遺跡として著名であるが、今回の調査は、今山の東麓を走る主要地方道の拡幅工事に伴うもので、幅約五m長さ二五mを調査対象とした。調査区の標高は三・九mである。検出した遺構・遺物は、平安時代の溝、古墳時代の製塩土器群、弥生時代の石斧製作関連遺構、縄文時代前・中期の遺物包含層で、地山の標高は最も低い所で五〇cmである。

（福　岡）

木簡が出土したのは平安時代中頃の溝で、この溝は調査区南端近くから始まり、北側に伸びて調査区外へ続いている。溝は底で幅約二・二mを測り、上幅五m深さ二・五m前後と推定される。南側両壁は石垣を施し護岸している。溝の底の途中に地山削り出しの土手が二カ所あり、土手を境に北側が深くなっている。南側土手は幅一mと広く、杭の痕跡が約一〇本ある。北側土手は幅五〇cmと狭いが、上面の標高を南土手とあわせている。南側土手から北には下層に水分を多く含んだ砂の堆積層があり、木簡はその層から自然木などとともに出土した。江戸時代の絵図によると、調査区北側には海が湾入しており、溝は湾の奥まで伸びると思われる。溝の南側土手から北には、満潮時には海水が入っていたとみられ、土手の存在や溝幅の狭さなどから、ドックの可能性が考えられる。

三点の削屑が出土したが、字が判読できるのは一点のみである。

8　木簡の釈文・内容

(1)　南□□

001

（米倉秀紀）